

成果報告書

 女性活躍魅力発信研究会

令和7年3月

はじめに

我が国経済は、原材料・エネルギー価格の高騰に伴うコスト上昇分の価格転嫁や取引適正化等の取組みが進められているものの、中小企業・小規模事業者においては、転嫁が進まず、コストを上回る賃上げ原資や利益の確保が困難である中で、構造的な課題とも言える人材の確保が急務となっております。

加えて、事業承継・事業引継、SDGs への取組み等に積極的に対応することも求められており、経営環境を巡る課題への対応が山積しているのが現状です。

国の「女性版骨太の方針2024」では、女性活躍・男女共同参画を推進するための「人材の育成」を横串に据えており、企業等における女性活躍の一層の推進や、女性の所得向上・経済的自立に向けた取組みの推進を目標に掲げています。

人口減少社会を迎え、我が国の持続的成長を実現し、社会の活力を維持していくためには、女性経営者等が組合女性部あるいは業種横断的な組織であるレディース中央会に結集し、個人では解決し得ない問題や課題に共同して取り組むとともに、積極的に情報交換を行い、個々の資質向上や組織活動強化のための方策を講じていくことの重要性がこれまでも増して高まってきていると同時に、その中心的な推進役となっていくことが期待されております。

このたび、本会では、現在の組合女性部の集合体であるレディース中央会の意義やあり方、今後の方向性等について論点を整理し、新たな組合女性部の活性化策の策定等に資すること、及び、中小企業・小規模事業者を取り巻く問題が山積みとなっている今日において、女性経営者が集い、連携の力を活用することによる女性活躍への新たな路を探すことを目的に、女性活躍魅力発進研究会を設置し、本報告書を作成いたしました。

本報告書が、これから本事業を実施しようとする中小企業組合等及び本事業を終了した中小企業組合等にとっても、より高い成果を得るヒントや成功へ導き出すためのきっかけとなり、ひいては、中小企業組合等のますますの活性化や発展に寄与することができれば幸いです。

最後に、本調査の実施にあたり、多大なご支援とご尽力をいただいた委員の方々をはじめ、本調査にご協力いただいた中小企業組合等の関係者の皆様に対し、深く感謝申し上げます。

令和7年3月
全国中小企業団体中央会

令和6年度 女性活躍魅力発信研究会実施要領

1. 趣 旨

我が国は人口減少と高齢化など社会経済の構造的な課題に加え、急激な円安に伴う物価高、エネルギー価格や食料品等の高騰、深刻化する人材不足、事業承継問題等により、多くの中小企業・小規模事業者は依然として事業継続や雇用維持など危機的状況に直面している。このような状況下において、経済市場における女性の活躍はこれまで以上に強く求められており、今こそ、女性経営者の持つ個の力を集結し、組合女性部だからこそできる「連携の力」をもとにさらなる女性活躍に向けた新たな路の模索及び拡充を行うべきときである。

そこで令和6年度は、昨年度までの組合女性部活性化研究会から女性活躍魅力発信研究会へと名を変え、組合女性部の活性化のみならず、未来の女性経営者を育てることも目的に加え、全国のレディース中央会の組織及び活動状況や全国で活躍する女性経営者等の事例を収集することにより、全国のレディース中央会が現在置かれている状況や課題から、今後のあるべき姿を検討するとともに、組合女性部ひいては女性経営者の魅力向上及び魅力発信を目的とする。

2. 実施方法

研究会は全3回の開催とし、第2回は各都府県レディース中央会会長等が参画し、各レディース中央会等の活動事例及び会員の特徴ある取組み事例等を踏まえながら、現在置かれている状況や課題について意見交換し、今後のレディース中央会のあるべき姿を検討する。第2回研究会以降は、抽出した課題をもとに協議し、女性活躍事例の発信・PRについての検討を行う。

また、先進的な取組みを行われている女性部会に対してヒアリング調査等の実施による実態把握を行うこととする。委員構成については、次頁委員名簿のとおり。

令和6年度 女性活躍魅力発信研究会 委員名簿

全国中小企業団体中央会
(順不同・敬称略)

専門家委員

宇佐川 邦子	株式会社リクルート Division 統括本部 HR 本部 ジョブズリサーチセンター長
諸 星 貴 美	株式会社エムキャリアサポート 取締役

団体側委員

吉 田 陽 子	宮崎県レディース中央会 会長
松 野 ミ ツ	青森県中小企業団体中央会レディース会 会長
宮 川 富 子	しが中小企業女性中央会 会長
荒 井 美佐子	みやぎレディース中央会 会長
藤 原 加 奈	岡山県ものづくり女性中央会 会長

(担 当)
全国中小企業団体中央会 振興部

目 次

はじめに	1
令和6年度 女性活躍魅力発信研究会実施要領.....	2
令和6年度 女性活躍魅力発信研究会委員名簿.....	3
1 女性活躍魅力発信研究会 実施報告	5
2 レディース中央会 活動事例紹介	13
3 活動事例から見えてくるもの	19

1

女性活躍魅力発信研究会 実施報告

女性活躍魅力発信研究会実施報告

第1回

- 期 日 令和6年7月12日（金）14：00～17：00
- 場 所 Web 会議システム（zoom）
- 協議事項 (1) 事業概要、スケジュール等実施要領について
(2) 組合女性部会の特徴ある活動取組事例について
(3) その他

第2回

- 期 日 令和6年11月7日（木）11：00～12：30
- 場 所 SHIROYAMA HOTEL kagoshima 2階「クリスタルガーデン A」
または Web 会議システム（zoom）
- 協議事項 (1) レディース中央会・組合女性部の特徴ある活動事例について
(2) 組合女性部の活性化の方向性についての意見交換
(3) その他

第3回

- 期 日 令和7年2月4日（火）10：00～12：00
- 場 所 全国中小企業団体中央会601研修室
（東京都中央区新川1-26-19）
または Web 会議システム（zoom）
- 協議事項 (1) レディース中央会・組合女性部の特徴ある活動事例について
(2) 組合女性部等の活性化に向けた今後の方向性についての意見交換
(3) 成果報告書（案）について
(4) その他

レディース中央会2024全国フォーラムin鹿児島 開催報告

- 日 時 令和6年11月7日（木）13時30分～16時50分
- 場 所 SHIROYAMA HOTEL Kagoshima 4階「エメラルド」
（鹿児島県鹿児島市新照院町41-1）
- 概 要

<基調講演>

テーマ：「奇跡を起こして人生と会社を立て直す方法」

講 師：株式会社タイヨー取締役副社長 清川 照美 氏

概 要：講師の清川照美氏は株式会社タイヨーの取締役副社長を務める。氏は株式会社タイヨーの2代目社長の妻として主婦業に勤しんでおられたが、監査役や取締役として経営に参画されるようになり、同社の2013年の危機には、率先してMBOを断行され、10年で借入金454億円を完済された経歴を持つ。「タイヨーの奇跡」と称されるスピーディーな社内改革について、実際の事例をもとに講演がなされた。



<パネルディスカッション>

テーマ：地域資源を活かして地元を元気にする女性リーダー

コーディネーター：一般社団法人鹿児島県中小企業診断士協会理事 瀬戸口 晴子 氏

パネリスト：指宿白水館 女将 下竹原 成美 氏

：軸屋酒造株式会社代表取締役社長 軸屋 麻衣子 氏

：株式会社下堂園代表取締役社長 下堂 蘭 麻実 氏

概 要：コーディネーターの瀬戸口氏による進行のもと、3名のパネリストの紹介がなされ、氏らの企業及び所属組合の活動が紹介された。鹿児島県が有する豊富な地域資源を活かした事業活動や、それらの活動による地域活性化、女性経営者ならではの視点で語る事業等についてディスカッションが行われた。



本フォーラム終了後には、17時50分より鹿児島県中央会主催の交流懇親会が開催された。

オープニングパフォーマンスとして、ヤング踊り連 Team 鹿女短によるダンスパフォーマンスが披露された後、鹿児島県中央会の小正会長、レディース全国フォーラム鹿児島大会実行委員会の森委員長による歓迎挨拶が行われた。続いて来賓として、鹿児島県知事 塩田 康一 氏（代理：鹿児島県 商工労働水産部次長 柿内 一樹 氏）、鹿児島市長 下鶴 隆央 氏（代理：鹿児島市 産業局長 新小田 洋子 氏）による祝辞が述べられ、株式会社商工組合中央金庫鹿児島支店 支店長 藤田 識雄 氏より乾杯のご発声をいただいた。

歓談中は、地元演奏グループ「あまみ絃人」による奄美島唄の演奏が披露された。続いて令和7年度全国フォーラムは、10月29日（水）に愛知県名古屋にて開催されることが発表され、あいち女性中央会より次期開催県のPR 動画放映と挨拶が行われた。

以上をもって、レディース全国フォーラム鹿児島大会実行委員会松下副委員長による中締めで20時に盛会の内に終了した。



主催者挨拶
森 洋・全国中小企業団体中央会会長



主催者挨拶
吉田 陽子・全国レディース中央会会長



来賓挨拶
秋吉 英治・九州経済産業局産業部長
（代理出席）



来賓挨拶
大塚 大輔・鹿児島県副知事
（代理出席）



来賓挨拶
松枝 岩根・鹿児島市副市長
(代理出席)



基調講演



基調講演
清川講師・株式会社タイヨー取締役副社長



基調講演



パネルディスカッション

交流 懇親会





▼パンフレット

ACCESS

会場のご案内

SHIROYAMA HOTEL Kagoshima (城山ホテル鹿児島)
〒890-8586 鹿児島県鹿児島市新開町41番1号
https://www.shiroyama-g.co.jp

鹿児島 KAGOSHIMA

鹿児島空港から

【タクシー利用】
タクシー乗り場から約1時間20分

【バス利用】
鹿児島市内行き8番乗り場から乗車、鹿児島中央駅下車(約40分)、城山シャトルバス(無料)に乗り換え(約30分)

鹿児島中央駅から

【タクシー利用】
タクシー乗り場から約10分

【バス利用】
西口(切子橋町)もしくは東口(中央ターミナルビル)から城山シャトルバス(無料)運行(約30分)

SHIROYAMA HOTEL Kagoshima (城山ホテル鹿児島)

公式HP シャトルバス 時刻表

お問い合わせ 全国中小企業団体中央会 総務部(女性部担当) TEL:03-3523-4905

KAGOSHIMA

レディース中央会 2024 全国フォーラム in 鹿児島

開催日 **11.7** (Thu)

「心が満たされるよかどこ」かっこよま

開催日時 **11月7日(木)**
13時30分～16時50分
交流懇親会/17時50分～20時00分

開催場所 **SHIROYAMA HOTEL Kagoshima** (城山ホテル鹿児島)
〒890-8586 鹿児島県鹿児島市新開町41番1号
全国フォーラム 4F エメラルド
交流懇親会 2F クリスタルガーデン

参加費 約200名 交流懇親会参加料 12,000円

主催：全国中小企業団体中央会 全国レディース中央会
共催：鹿児島県中小企業団体中央会 レディース中央会全国フォーラム in 鹿児島実行委員会

レディース中央会 2024 全国フォーラム in 鹿児島 KAGOSHIMA

2024 Ladies Chuokai National Forum in KAGOSHIMA

FORUM [フォーラム]

▶開場 12時30分～受付(4階 エメラルド)

- 01 開会 13時30分**
- 02 主催者挨拶**
全国中小企業団体中央会 会長 森洋
全国レディース中央会 会長 吉田 陽子
- 03 来賓紹介(予定)**
九州経済産業局、鹿児島県、鹿児島市、株式会社商工組合中央金庫鹿児島支店、全国中小企業青年中央会、全国中小企業組合士協会連合会、鹿児島県中小企業団体中央会青年部会、鹿児島県中小企業団体士協会
- 04 来賓挨拶**
九州経済産業局、鹿児島県、鹿児島市
- 05 基調講演 14時00分～15時00分**
『奇跡を起こして人生と会社を立て直す方法』
講師 株式会社タイヨー 取締役副社長 清川 照美氏
- 06 パネルディスカッション 15時20分～16時50分**
「地域資源を活かして地元を元気にする女性リーダー」
コーディネーター 一般社団法人 鹿児島県中小企業診断士協会 理事 瀬戸口 晴子氏
パネリスト 鹿児島女子大学 教授 地域学部長 下竹原 成美氏
パネリスト 株式会社下置業 代表取締役専務 下堂園 麻実氏
パネリスト 株式会社下置業 代表取締役専務 下堂園 麻実氏

交流懇親会 17時50分～20時00分 (2階 クリスタルガーデン)

- 1 歓迎アトラクション ヤングリーダー Team 鹿児島
- 2 開会
- 3 歓迎挨拶 鹿児島県中小企業団体中央会 会長 小笠原 亮 全国レディース中央会全国フォーラム in 鹿児島実行委員会 委員長 森 洋
- 4 来賓紹介・祝辞
- 5 アトラクション 若き若人(つじざんせ)
- 6 次期開催地紹介 鹿児島
- 7 閉会

本フォーラムは、組合女性部等の特色ある取り組みや中小企業の経営者として活躍する女性の具体的な取組事例を紹介し、全国の女性経営者等が意見交換、研究討論等による相互研鑽を図ることで、女性経営者の能力開発と資質向上、組合女性部の組織化、発展に資することを目的に開催いたします。

2

レディース中央会活動事例紹介

岐阜県中小企業団体中央会

レディースクラブの取組み

～組織間の横断交流を通して自組織を活性化～

◆組織概要・プロフィール

岐阜県中小企業団体中央会女性部レディースクラブ

○設立年月日：1999年12月15日

○事業年度：4月～3月

○会員数（※2024年7月1日時点）：

団体会員 1名

個人会員 29名

○会員資格：

団体会員：県内中小企業組合等の女性部（任意グループを含む）

個人会員：県内中小企業組合等の女性経営者、女性役員等

その他本会の趣旨に賛同する者

○主な事業：

(1) レディース活動推進事業

(2) 交流促進事業：県外女性部との交流（全国フォーラムへの参加等）

(3) 福利厚生事業：交流会の開催

(4) 会員増強事業

○会長：谷田 育子

（株式会社谷田商店 取締役会長）

○役員構成：会長1名、副会長5名、理事4名、監事2名

(取組みの背景と概要)

当県女性部は設立後25年が経過したところである。設立以降四半世紀が経過し、活動の歴史を積み重ねてきた一方で、近年、会員の高齢化に伴い、組織の活性化に向けた取組みが課題とされていた。そこで、女性部の次世代を担う若手の現役女性経営者を中心とした新規会員の獲得、育成を目的とし、会のこれまでの取組み事例を「あゆみ」として冊子に取りまとめた。谷田会長自らが会の趣旨や活動内容をPRし、意識的に自分たちが所属する会の存在を知ってもらうことにより、女性部（会）の認知度の向上に努めている。また、組織の活性化を図るべく、従来より事業として実施していた会員相互の親睦交流に留まらず、事務局間での情報交換がきっかけとなり実現に至った、他地域女性部との組織間の横断交流や企業視察等を行い、参加者自らが発信・体験できる場や機会を創り出すことにより、常に新しい体験、新しい交流を実践している。



■組織での取組み

- ・女性経営者等支援セミナー、企業視察、県外女性部との交流などを行っている。他地域の中央会女性部と交流会も実施しており、地域を超えたつながりを推進している。
- ・コロナ禍の影響もあり、中断していた時期もあったが、企業視察は毎年実施している。岐阜県はもちろん、愛知県や滋賀県など県を超えた企業視察を行うこともある。近年は岐阜県内で企業視察を実施していたが、今年度は「工場見学で学びの場を創出」、「研修だけではなく、楽しいイベントを」との企画コンセプトのもと、しが中小企業女性中央会と共同で交流促進事業及び企業視察事業を実施した。当県女性部では、企業や会員同士が直接顔を合わせるこ

とでのつながり（Face to Faceの関係性）の強化、新しいものを取り入れる「学び」での目的を取り組みの主・柱としている。

- ・設立以降24年間（1999年度～2023年度）の取組事例を‘あゆみ’としてまとめるなど、会の主旨や活動内容を紹介したチラシ等を作成し、会長自ら様々な機会に配布をすることで、新規会員獲得を目的とした認知向上に努めている。最近では、発信力の強い若い会員が入会したことによって、直近5年間で3会員が新たに加入し、母から娘に引き継ぎ世代交代ができる土壌が培われてきており、女性部の活性化につながっている。

【参考】岐阜県中小企業団体中央会レディースクラブホームページ「活動・報告」より転載（URL <http://www.chuokai-gifu.or.jp/chuokai/ladys/activity.html#25>）

【令和6年度県外女性部との交流促進事業及び企業視察事業の実施】

開催日：2024年10月2日（水）

視察場所：ファブリカ村（滋賀県東近江市佐野町657）

交流先：しが中小企業女性中央会

しが中小企業女性中央会の会員の皆様と合同で、ファブリカ村を訪問しました。

代表 北川陽子様のお話しをお伺いし、「培ってきたものを大切にしながら、進化させていく」マインドを学び、後半は端切れを利用した手作りワークショップを体験させていただきました。視察の後は、昼食をとりながら両県の交流を深めました。

■女性支援の取り組みについて

- ・経済的視点から見たアプローチで悩みを抱える男性経営者に対し、女性経営者はもっと身近な視点での悩みを抱えることが多い。女性経営者間における課題感として、多勢を占める男性経営者とは経営上の悩みの種類が異なることや、公で女性経営者が悩みを相談できる集いの場が少ないことが挙げられていた。その状況で一経営者として孤軍奮闘し、心身に不調をきたしながらも一人で頑張らざるを得ない状況に追い込まれ、なかなか課題を解決できずに思い悩む、という悪循環が生まれやすい。女性経営者が集まるレディースクラブの取り組みの場は、そうした「今まで相談できなかった悩み」に寄り添い、決断する助けにもなっている。
- ・毎年開催される支援セミナーでは、医師やフードプロデューサーを講師に招いての「健康管理法」や「食事術」、「見た目のイメージアップ」でコミュニケーションを変えようというテーマのものなど、経営から少し離れた「身近な視点」からの気付き・発見を感じられるような内容も織り込んでいる。
- ・他人の真似をすることに抵抗がなく、つながりを隠さない部分は女性の良さでもある。企業視察や懇親会で得たネットワークを使って、地域や産業などのあらゆる垣根を越え、変化していける可能性を持っている。女性らしい柔軟性を刺激する場・機会として、レディースクラブとしての取り組みを活かすべく試行錯誤を重ねている。



■今後の課題

- ・若い会員や事務局がもっと発言しやすい場を作り、出されたアイデアを活かして形にしていきたい。
- ・新しい会員をどう増やしていくかはもちろん、加入後に継続してもらうためのフォローも重要だと考えている。特に加入し、活動を続けてもらうためには、楽しい体験や交流といったつながり部分の取り組みが必要だと感じる。そのためにも、若い会員や事務局からの新しい視点・意見が必要不可欠になってくる。
- ・今後目指していくべきところとして、「もっとワクワクする事業を考えること」、「経営の悩みを相談し、情報交換できる場をつくること」に積極的に取り組んでいきたい。

岐阜県中小企業団体中央会レディースクラブの取り組みから見えてくるもの

～専門家委員の視点より～

Point

- ・新規会員の獲得のみならず、加入後の継続フォローにも目を向けている。
- ・会（女性部）の持続的な運営に関する視点を持ちつつ、「ワクワクする楽しい体験」を活動の軸と定めている。
- ・横断したつながりを活かし、課題解決に踏み出している。

▷コメント

- ・新規の会員獲得、特に若い会員を獲得してレディースクラブの継続・活性化を図ることを課題として持っているのは、他地域の女性部とも共通する。ただ岐阜県の場合は、「Face To Face」や「ワクワクする（楽しい）体験」を活動の軸とし、地域内外の資源とつながることで課題解決に踏み出していると言える。「参加してワクワクした、また（次回も）参加したい」と新規の会員に思ってもらうことこそが、継続的な参加のためには重要と位置付けている。（経営には直接の関わりが薄そうな「食事」や「見た目」をセミナーテーマに起用するなど、心理的なハードルを下げる工夫を実施している。）
- ・谷田会長より「発信力の強い若い会員、事務局」の意見を活かしたいとの発言も多く、従来とは異なる新たな視点での活動を企画・実行することで、課題と向き合っているようであった。会員が肌身に感じる「ワクワク」を増やし、さらにそれを引き継いで、活動の主体者として動いていけるような次世代の新規会員の獲得・継続を目指していると感じた。

定期的に行われる支援セミナー等を単に座学で終わらせるのではなく、「直接お互いが顔を合わせて交流・体験できるコンテンツ」として提供していることが岐阜県の特徴とも言えよう。結果、新たな気付き・つながりが得られた、悩みの解決やビジネスでのヒントにつながった、などの明確な成果を参加者が実感しやすくなる。そうすると、また参加しよう、知り合いを誘ってみようといった好循環が生まれるのではないだろうか。

「新規会員獲得」や「若い会員・事務局の意見取り入れ」は、他の女性部でも見られる課題感・取り組み方針ではあるが、より具体的に取り組みの軸やキーワードを明確にしたことで、組織内部での方針の「見える化」ができており取り組み事例であるように思う。

石川県中小企業団体中央会 女性部の取組み

～能登半島地震の支援事業を通じて～

◆組織概要・プロフィール

石川県中小企業団体中央会女性部

○設立年月日：2000年11月29日

○事業年度：4月～3月

○会員数（※直近通常総会開催日時点）：

個人会員 0名

団体会員 16名

○会員資格：県内の中小企業組合等女性部及び女性を中心とした中小企業組合等

○事業：

- (1) 各種研修会、講習会等の開催
- (2) 事業に係る調査及び研究

(3) 会員相互の交流、情報交換を図るための事業

(4) 県内中小企業組合等に女性部設置の推進と組合女性部の活動推進

(5) 石川県中小企業団体中央会が行う事業に対する積極的協力

(6) 会員相互の親睦のための福利厚生事業

(7) 地域社会に対する奉仕

(8) 前各号の事業に付帯する事業

○会長：泉崎 富子

(SPCJAPAN 北陸事業協同組合 理事長 / 株式会社
オフィス・べっぴん代表取締役)

○役員構成：会長1名、副会長2名、理事4名、監事1名

(取り組みの背景と概要)

2024年1月1日に発生した能登半島地震の支援として、当県女性部として何かできることはないか、と泉崎会長による立案のもと役員会にて検討したことが本取り組みのきっかけである。

当県女性部副会長が代表を務め、白山一里野温泉宿泊施設の女将を中心に組織される「おかみの会」は、県からの要請を受け、地震発生から1週間ほどで被災者の受け入れを開始し、会員のうちの7施設で40人～50人の能登半島地震の被災者の受け入れを行っていた。そのような中、当県女性部では、地震発生から一日も休み無く働き通して疲労が蓄積しているおかみの会の女将たちの手伝いや癒しの提供を行うことで、被災者支援だけでなく、支援者に対する労い・サービスを提供することで間接的な支援ができないかと考えた。そこで、能登地区だけでなく、遠方に避難されている被災者及び被災者の受け入れを行っていた事業者を主な対象として、慰労の意味を込めてお茶とハンドケアに関する講話と実践により、癒しの提供を行った。

■組織での取り組み

- ・2023年に「つながり・広がり・研鑽」というキーワードを主眼に置いた活動を開始。2024年は能登半島地震の復興など、社会貢献・地域貢献を主とした活動を実施する。
- ・2024年の活動で最も中心的な役割を果たしたのが当会女性部副会長が代表を務める‘白山一里野温泉観光協会おかみの会’である。

＜白山一里野温泉観光協会おかみの会 概要＞

35年ほど前に初代会長が「若い女将さんと月1回お茶を飲んで話をしながらコミュニケーションを取ろう」という目的で、白山市の白山一里野温泉で宿泊施設業を営む女将を中心に組織された団体である。春・秋には山菜やきのこを女将さん達が調理して振るまう、夏はホテル観賞会の企画・開催といった、季節ごとに地域のイベントを企画から運営まで行い、地域を訪れる方も含めて関わりを広げてきた。白山市や観光協会が主導する音楽祭の飾り付け、「白山ジオ弁当」など郷土料理を含めた手作り弁当のテイクアウト販売など、「何か貢献したい、できることがあれば」と積極的に取り組んでいる。現在では市から企画段階で相談されることも多い。



■能登の震災と関連する取り組みについて

◇‘おかみの会’が中心となり進めた受け入れ地域の状況

- ・2024年元日に地震が発生したことに伴い、1月10日には石川県から白山一里野温泉の各宿泊施設に対し、被災者受け入れの打診がなされた。これを受け、おかみの会では通常であれば、緊急対応であっても受け入れには2週間程度要するところを、1週間程度に短縮した期間で態勢を整え、受け入れを開始した。4月には大半の避難者が退去し、二次受け入れが開始された。このとき新たに入居した人達が、能登の復興イベントの手伝いをしてくれたことで、地域内での良好なネットワークを築くことができた。しかし

一方で、当該地域は本来4月～7月は閑散期にあたるが、2024年に限っては震災の被災者受け入れを行っていた関係で、女将達はまったく休みを取ることができない状況にあった。

◇女性部全体での取り組み

・当県女性部では、会長を筆頭に「能登の震災は石川県全体で受け止めるべき事態である」という認識のもと、会員がそれぞれ自分たちにできること、貢献できることはないかと模索していた。当初、メディアによる報道効果等もあり、能登地区へのボランティア派遣による支援活動は浸透してきている状況にあったが、能登地区以外に避難している被災者に対する支援は少ない状況であったことから、当県女性部会員の宿泊施設で受け入れている被災者の方々も対象とした支援ができないかと役員会等で検討していた。また、被災者に加え、地震発生後から一日も休み無く働き通して被災者の受け入れ支援を続け、疲労が蓄積しているおかみの会のメンバーも主な対象として、慰労の意味を含めた支援を実施することとした。被災者も支援者も、ともに見えないストレスが募っていると思われるものの、なかなか言い出せない状況にあるだろうと考えられたため、少しでもストレス緩和の一助となるよう、癒しの提供やセルフケアの方法も提供することとした。そのような中、2024年9月24日（火）に当県女性部副会長が運営する宿泊施設において、白山一里野温泉観光協会おかみの会より5名、能登半島地震による被災者4名を含めた22名が出席し、被災地支援の一環として、女性部会員による協力のもと、お茶とハンドケアに関する講話と実践により、ストレス緩和のための癒しの提供ならびにセルフケア方法の支援を行った。

【(石川県中小企業団体中央会女性部主催)

能登半島地震の支援事業 開催概要】

開催日：2024年9月24日（火）

場 所：一里野温泉 HOTEL 牛王印

参加者：白山一里野温泉観光協会おかみの会より5名、
能登半島地震による被災者4名を含めた22名

テーマ：

(第1部)

日本茶の種類とお茶の淹れ方・楽しみ方について

講師：石川県茶商工業協同組合所属

小林屋茶舗合同会社

代表社員 小林 一茂 氏

(第2部)

ハンドケアの効果とセルフケアについて

講師：石川県化粧品小売協同組合所属

Binocot ゆり 代表 古池 りか 氏

経過：

第1部では、日本茶の種類とお茶の淹れ方・楽しみ方について、加賀棒茶や加賀の紅茶、最高級の伝統本玉露などの試飲をしながら歓談いただいた。第2部では、ハンドマッサージをし合うなど実践を交えて、「第二の脳」と言われている手をケアすることで、心身への効果と重要性を感じていただいた。



◇取り組み後に寄せられた声

参加者の方達からは「地震に加えて、豪雨被害で心が落ち込んでいたが、とても癒された」「このような時間は久しぶりで元気をもらえた。本当にありがたい」などの声が聞かれた。一方、支援者側からは「プロの施術ではなくても、直接触れ合いながら、コミュニケーションをすることが大切。特に女性は笑顔になってくれて、やってよかったと感じた。」「会員全体を巻き込んだ震災復興・盛り上げに寄与したと感じている。一体感の醸成にはつながったと思う。」などの声があがった。

■今後の課題

- ・石川県中小企業団体中央会女性部会員の一部では、高齢化による会員数減や活動の継続が危惧されている。
- ・おかみの会についても、男性も含めて現在11人のメンバーで活動している。立場や意見の否定を気にすることな

く、自分の意見を口にできる対等な関係性を築いている。35年前の初代女将の時代から、ほとんどメンバーの入れ替わりもないため、高齢化が進んでいる。弁当作り等における身体的負担感が増していることなどもあり、若い人に加えてもらいたい。せっかく続けてきたものを次世代にも繋げていかなければ、とは感じている。

石川県中小企業団体中央会女性部の取り組みから見てくるもの

～専門家委員の視点より～

Point

1. 地域との自発的な連携ができています
2. 会（女性部）の活動がキーワード化されている
3. 会員自らが自発的に動いている

▷コメント

取り組みに至る経緯、実践経過全体を通して、石川県中小企業団体中央会女性部、‘おかみの会’ともに、内部で階層的ヒエラルキーが発生していないという部分をもって、「構成員が自律的に活動し、つながりが拡大・強化している好循環ができている組織＝活性化している組織」との印象を得た。

女性部では、何かを決める際にひとりで完結せず、全員で意見を言い合いながら決めていける好循環が自然とできあがっている。加入歴が浅い会員であっても自由に発言できる雰囲気があるとのことから、自然と「何か貢献したい、できることがあればやりたい」という言葉が出てくる環境にある。

石川県中小企業団体中央会女性部では、緊急事態（地震の発生）を契機に被災地支援の一環として、疲労が蓄積しているおかみの会の女将達に対し、慰労の意味を込めてハンドケアを実施した。これは、女性部会長が理美容組合の理事長であるという点に加え、被災者支援だけではなく、支援者への配慮も大切であるという観点から行われたものであった。つい被災者中心の支援になりがちとなるところを、支援者の側である「おかみの会」を労ったところに女性特有の視点があると考えられる。

また、女性部で年度ごとにテーマを設定し、活動を展開している点も組織の活性化に向けての重要なポイントであろう。2024年度は社会貢献・地域貢献を主とした活動を実施した点にもあるように、闇雲に何でもやれば良いわけではなく、主眼に置かれていない事項は取捨選択したうえで捨てること、当該年度ごとの活動目標を明確にし、優先事項を定めることが必要である。今回の取り組みについては、

自然発生的に各会員ができることを実践し、孤独・孤立に対して人と人の触れ合いが被災者・支援者双方の心を癒した。ボランティア活動は個人や一企業で完遂することは難しく、団体として活動することに価値があると感じられる。

一方、おかみの会では、お茶会から派生した影響か、日常的な雑談の場から積極的に女将からアイデアが発案され、実行協力も提案することで、市の担当者から頼られ、日頃から市と良好な信頼関係を築いている。地域のイベントを市などの行政機関や他協会と連携して実行した結果、住民のロイヤリティ向上、地域への来訪者増促進による地域産業活性化にもつながっていると言える。特に、震災等の緊急時以外でも地域活性の欠かせない存在として定着していることに着目すべきであろう。地域へのつながり・貢献に向けた行政との関わり方の好事例と言える。

3

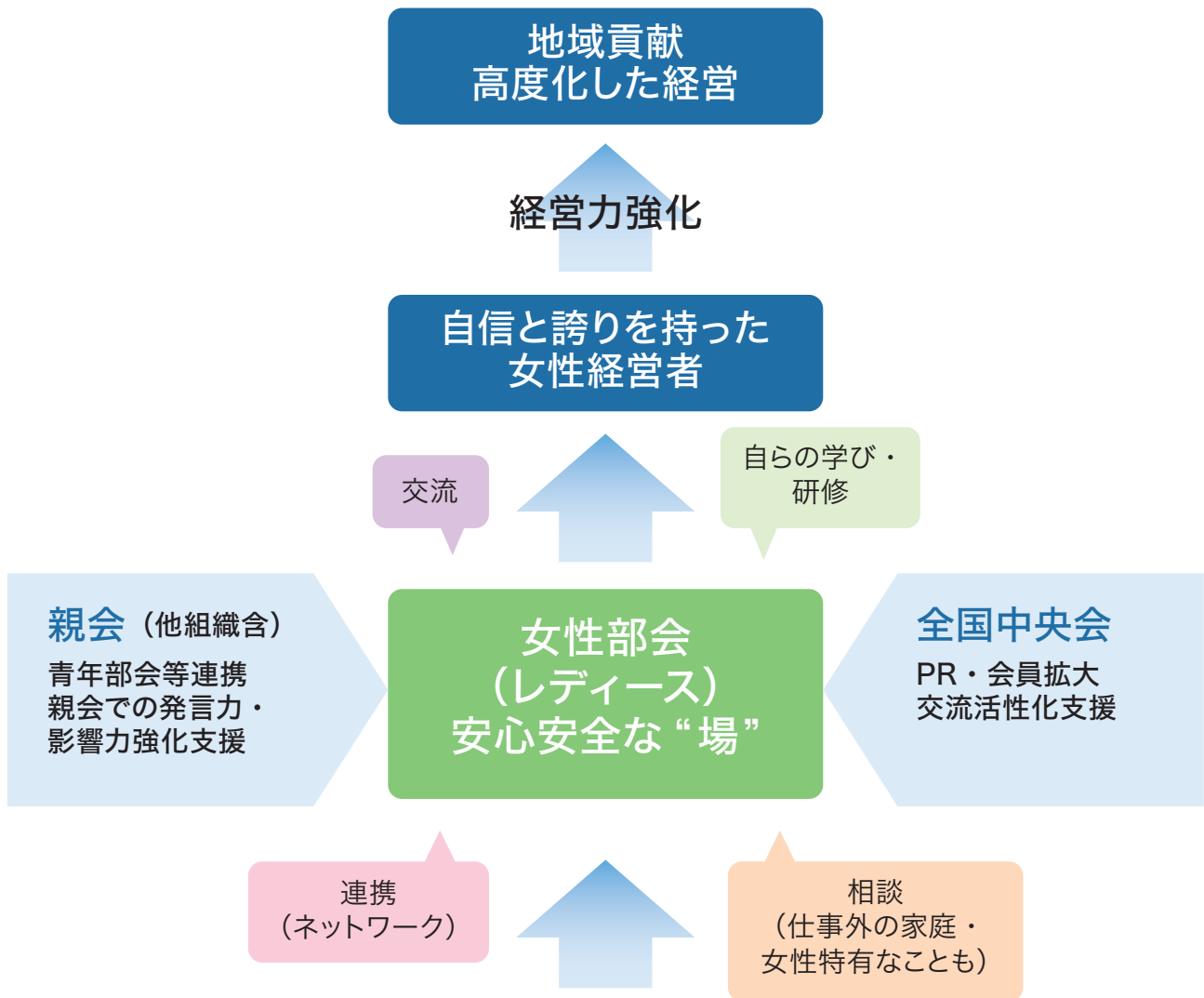
活動事例から
見えてくるもの

女性部会の活動事例から見てくるもの

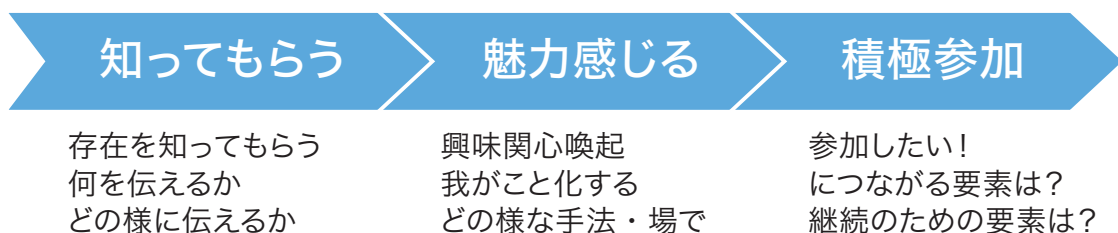
令和5年度は本事業において女性部会のさらなる活性化に向けてビジョンを言語化し、女性部会（レディース会）の魅力は、「安心安全な学び・成長の場」たることであること、そして、女性部会の活動を通して「自信と誇りを持った経営者」を育成し、結果的に「地域貢献」、「高度化した経営」につなげていく、という最終ゴール地点として目指していくビジョンが明確になった。

令和5年度

ビジョンを言語化

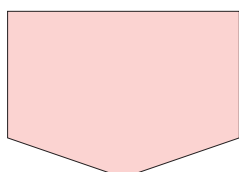


会員増（若手増）＋関わる人・組織増



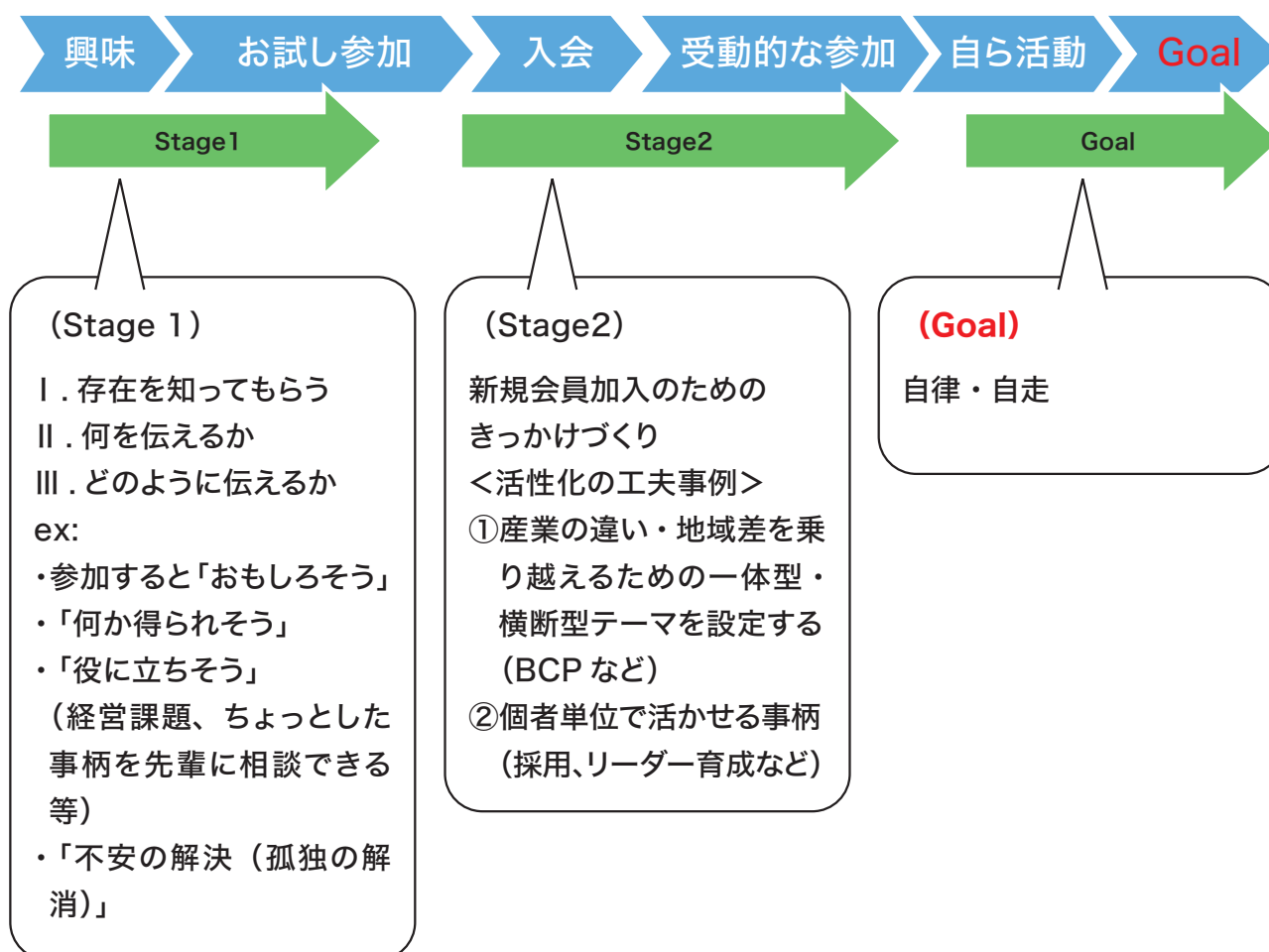
令和6年度

女性部会が継続的に発展できる組織づくり
～ビジョンをより強固に体現するためのステップ～



目的

新規（次世代を意識した若い会員）会員の獲得



このたび、石川県中小企業団体中央会女性部及び岐阜県中小企業団体中央会レディースクラブへのインタビュー、研究会での意見交換を通じて見えてくる共通項、ひいては女性部会の強み＝魅力について確認することができた。本年度はそこから「安心安全な‘場’」として存在する女性部会の魅力をいかにして外に広げていくか、発信するか、そして、活動事例を通して見えてくる継続的に発展できる組織づくりとは、持続可能な組織の運営に向けた方策について改めて整理してみたい。

今回、取り組んでいる内容が全く異なる石川県と岐阜県の活動事例を通して3つの共通する要素が浮き彫りとなってきた。

(共通項)

- 地域との密接なつながりを大事にする（連携と広がり→繋げる、広げるの実践）
- 会員の自発性を引き出す取り組みを自主的に創出する（共助を活かす、協創する→活性化に向けたサイクル）
- 活動の軸、重点事項をキーワード化し、判断基準を明確にする（テーマ設定→自律・自走に向けた第一歩）

地域との密接なつながりを大事にする

行政や地域の様々な団体と日常的にコミュニケーションをとりながら連携を図り、地域との繋がりを深め、コミュニティを築いておくという、女性部会における日頃の活動が結果的に安心・信頼される団体として女性部会の存在感のアピールに繋がっている。構築したネットワーク、繋がりを如何なく活用し、地域や産業などのあらゆる垣根を乗り越えて横断的な連携を図ることができる点、地域を単位とした活動を認識し、女性らしい柔軟性を刺激する場・機会として変化していける可能性を秘めた団体である点が女性部会の強みであり、魅力の一つと言えるだろう。石川県や岐阜県のみならず、女性ならではの視点と経営者としての視点、関わり方、これらを掛け合わせられることを強みとして地域に貢献し、目的を持った会合と、自由な雑談の場を両立させながら行政や地域からの信頼を得ることにより、女性部会の存在感が増し、存在価値を高めることに成功しているという好循環が活動事例から見受けられる。

会員の自発性を引き出す取り組みを自主的に創出する

石川県の事例においては、会員からは「高齢になり体力的にも少し大変」といった声が増え、活動としては縮小傾向にあるとのことであったが、周囲から頼られると結局は「やろう」と意欲的に動いており、会員が自ら活動するきっかけとなっているようだ。行政とおかみの会の間でも、頼られることでみんなで知恵を出し合いアイデア等がブラッシュアップされており、「期待されることで新たな価値を生む」という好循環が形成されていた。頼られる、期待されることによって会員各々が協働し、できることを自発的に取り組むことで活動実績に対する成果が生まれ、最終的には会員（企業）の成長、ひいては女性部会の活性化につながるという状況が自然と創出されている。資金をいかに増やそうか、資材を入れようか、という男性目線の発想ではなく、寄り添い伴走する、助け合いの精神のもと「やれることをやろう」という女性の感性を活かした発想、アプローチの最たるものと言える

のではないだろうか。

岐阜県の事例においては、交流企画を実践する際に若い会員や事務局、新規で加入したばかりの会員それぞれが主役となり、自分のやりたいことが実現できる、やりたいことができるという実感を得られるよう意識しているとのことであった。新規会員は新しいアイデア、視点を得たい、チャレンジするエネルギーをもらいたい、といったニーズを女性部会に求めている。身近に感じられる『すぐ』活用できて、『すぐ』成果が出るテーマを積極的に取り入れていることが会員・企業の学び・成長に直結するという前提要件を自ずと創出していると言えるだろう。

活動の軸、重点事項をキーワード化し、判断基準を明確にする

各女性部会でやるべきこと、進めた方が良いものをキーワード化する過程で明確になる課題や、気づくことがある。石川県の事例においては、災害復興を契機とした社会貢献・地域貢献を当該年度の活動重点事項（活動テーマ）に定めていた。災害復興支援にあたっては、いくら志や助け合いの意欲が高くとも、一人の経営者、1社で実現できることには限界がある。各自・各社の強みを持ち寄るとともに、他組織・団体を巻き込み一緒に取り組む仲間を増やすことで「団体」の力を活かし、困難な地域課題の解決につながる取り組みや、より広い範囲に取り組みを普及することを可能とし、最終的に女性部会としてやりたいこと（被災者だけではなく、被災者の受け入れ支援をしている支援者への労い）を実現している。

岐阜県の事例においては、女性部が設立されてからこれまでの活動実績を「あゆみ」として冊子に取りまとめ明文化することで、女性部会がどのような場であるか、女性部会が目指していることを明確にし、魅力や存在価値をわかりやすく説明できるようにしていた。

また、地域横断での実行体制を組むことで、参加するとおもしろそう、何か得られそう、役に立ちそうと感じてもらうためのアプローチを施していた。女性部会として目標定義している新規の若手会員の獲得に向けて、次世代の女性経営者を対象として同じ目線の高さでアプローチすることは効果的なケースであると言えるだろう。

これまでに各女性部会の取り組み事例から見えてくる女性部会の魅力、存在価値について述べてきたが、次に、女性部会の魅力をいかにして外に広げていくか、発信するかという視点から、活動事例を通して見えてくる継続的に発展できる組織づくり、持続可能な組織の運営に向けた方策について考えてみたい。

新規会員、特に若手層の獲得は、どの組織も最も重要な関心事である。新規会員の獲得を目指して、女性部会がはじめに取りかかるべきことは会の存在を「知ってもらう」ことに尽きる。そこで、自分達の存在を知ってもらうためには、“何を”“どのように”伝えるかという視点が重要である。具体的な方策としては、例えば、年間のイベントカレンダーを準備し、周りの方々に一部だけでも一緒にやってもらえないかと巻き込む形にする。毎年その時期に手伝いをしていたら、自然とその企画を担う人材となっていた、というような緩やかな巻き込みの形なども、今後の一手として検討できると良いだろう。会のファン・味方・サポーターを増やしていき、会の活動の後押しをしてもらうための仕組みづくりの第一歩とも言えよう。

緩やかな巻き込みに成功すれば、次のステップは加入（入会）に向けたアプローチへと移行する。加入のためのきっかけ作りにおいては、いかに興味関心を喚起させるか、我がこと化するか、という観点において、各女性部会の工夫があらわれやすい。ここで発信すべき内容は、会員に加入することで

得られるインセンティブやメリット、組織化すること＝女性部会「団体」組織自体の魅力である。興味・関心を喚起するために工夫するポイントとしては、活動事例から見ると、産業・地域差がない横断型テーマを設定する、採用・リーダー育成研修等といった、個者単位で活かせる学びや体験の場の設定などが挙げられる。

そしてさらなるステップとして加入（入会）に向けたアプローチに成功した後は、新規会員に加入を継続してもらうべくフォローする視点が求められる。大概、入会后1年が経過するまでは、様子を見ながら受動的に参加するケースが多いと思われる。本格的に活動してもらう、活動への参画を継続してもらうには、活動する際に喜びやワクワク体験を上乗せするべく、付加価値を設定することが鍵となるだろう。「楽しい」と感じることであれば占めたもの。自分らしく、自然と自らが自発的に動く。こうして活発な活動が継続され、組織全体の活性化につながり、好循環が生まれる。会員自身、企業単体、会全体それぞれの持続的な成長につながり、自律、自走できる継続的に発展していける組織運営が可能となれば、そこでゴール地点に到達する。

新規会員の獲得に向けたアプローチを試みる際、会や企業、個人での活動を実践する際には常に「ワクワクするか」という軸を選択の基準とし、楽しい体験を積み重ねていくことがアクションプランを策定するうえでは有効な方策となるであろうと考える。

